

地獄の一季節註解(三)

小田良彌

☆

Le sang païen revient ! L'Esprit est proche : pourquoi Christ ne m'aide-t-il pas, en donnant à mon âme noblesse et liberté.

Hélas ! l'Evangile a passé ! l'Evangile ! l'Evangile.

J'attends Dieu avec gourmandise. Je suis de race inférieure de toute éternité.

異教徒の血が戻って来る。聖靈は真近かにある、何故基督は、俺の魂に高貴と自由とを与へて、俺を助けては呉れないのか。ああ福音は去ってしまった。福音よ。福音よ。

俺は食欲にがつかつと『神』を待ってゐる。俺は永久無限の劣等人種だ。

Le sang païen revient ! L'Esprit est proche : pourquoi Christ ne m'aide-t-il pas, en donnant à mon âme noblesse et liberté: — sang est mauvais sang における sang と同じく、ほとんど機質的に人間を左右してゐるものとしての血である。神に対する人間の血である。païen は、前出 paroles païennes の païen と同じく、神の世界

ならぬ、外道としての人間の世界、日常常識的、相対的世界に属するものであることを示す。したがって sang païen は実質的には mauvais sang と同じ意味とみてよい。

前節 (p. 15—p. 17) において、キリスト教の国フランス、科学の世界フランスの中に自己をおいてみて、そのどこにも自己の世界を見出すことはできず、劣等人種として、このフランスの歴史の歩んできた方向を逆戻りしたところに、その方向に Esprit、神の世界を見出したのである。

ところがこの le sang païen は戻ってくる。それは、所詮はこの生身の人間としてはさけ難い。抽象的観念的世界に逃避するのでなければ、この le sang païen の生身に足を据ゑねばならない。

劣等人種として、キリスト教の国フランス、科学の世界フランスの否定の方向にある俺には Esprit、神の世界は近い。しかし le sang païen は戻ってくる、この le sang païen の生身に足を据ゑねばならない。そこに Esprit は真近かでありながら、なほがつかつとして神を待たねばならない理由があり、この両者の交互轉換的展開をまたねばならない

理由がある。この両者の交互轉換的展開が行はれるところに、*race inférieure* の世界が即 *le sang païen* の世界であり、*le sang païen* の世界が即 *race inférieure* の世界である神の世界が現成し、そこにもはや神をまつことのない、一步一步に神の現成を行じ行く世界がひらけてくる筈である。

Cf. *L'homme juste.*

Socrates et Jésus, saints et justes, dégoûts !

Respectez le Maudit suprême aux nuits sanglantes.

ソクラテスにイエス様、聖者に正義派、汚らはしや！

血潮にまみれた夜な夜なの「夜の」呪はれた人間こそ敬ぶがいい！
かくいふわけである。この血にまみれた夜の *le Maudit*こそ神の現成の媒介となるものであり、*le Maudit* は即 *Dieu* であり、*Dieu* は即 *le Maudit* である。

ところが彼岸の世界の神としてのキリスト教の神は、この *le sang païen* の戻ってくるところには現成しない。ここにキリスト教の救ひはない。だから *pourquoi Christ ne m'aide-t-il pas, en donnant à mon âme noblesse et liberté* といふわけである。キリスト教の神ならぬランボオの神はこの *le sang païen* を媒介として、そこに現成するものがある。即ちランボオの世界においては本来、*le sang païen* と *l'Esprit* とは相即的に結びつくべき性質のものである。が今は、この両者をひきはなしてゐる。

それは本節の終りて、

Je reviendrai,.....J'aurai de l'or :..... Je serai mêlé.....

この様に *futur* の形で、還相の思想を語っているのであるが、しかしこれは本節においてはいはば思想的予見であって、本節における現在の身の処し方としては

Maintenant je suis maudit, j'ai horreur de la patrie. Le meilleur, c'est un sommeil bien ivre, sur la grève.

と書いてある様に、なほ砂浜における酔眠を求めているのである。かく思想的予見としては還相行を考へつつも、なほ砂浜における酔眠を求め、本節の今の立場においてこの二つをひきはなしているのである。

なほ *noblesse, noble* については、これらの語がランボオにおいても単に世俗的な意味での貴族、貴族的の意味に使はれてゐる場合もあるが、ここではランボオの世界の神性をさして *noble* といひ、したがってキリストが自己の魂に、かかる意味での *noblesse* を与へてくれなことを望んでいるのである。

Cf. *Nuit de l'Enfer*, p. 33.

J'avais entrevu la conversion au bien et au bonheur, le salut. Puis-je décrire la vision, l'air de l'enfer ne souffre pas les hymnes ! C'était des millions de créatures charmantes, un suave concert spirituel, la force et la paix, les nobles ambitions, que sais-je ?

俺は以前から美と幸福への改宗を、救ひを、予見してはゐた。俺は幻を描けるだらうか。地獄の風は讃歌など我慢がならぬ。それは愛すべき幾百萬の創造された物だった。精神的な爽快な奏樂、力と平和、高貴な大望の数々、ああ俺が何を知らう。

Cf. Enfance.

Cette idole, yeux noirs et crin jaune, sans parents ni cour,
plus noble que la fable, mexicaine et flamande;

この偶像、眼は黒く髪は黄に、親もなく、侍者もなく、物語よりも気高く、メキシコ人でありまたフラマン人。

その他、Promontoire 等参照。つづれもキリスト教の神ならぬランボオの世界の神性をさして noble と云つてゐるのである。

Liberté とは自由

Cf. Les Poètes de sept Ans.

A sept ans, il faisait des romans, sur la vie
Du grand désert, où luit la Liberté ravie,

七歳にして、彼は大沙漠の生活に關する
数々の小説を作った。其処には楽しい自由が輝いてゐる、

即ち近代ヨーロッパの否定、沙漠における、「自然」における自由である。

Cf. Fêtes de la Patience, I.

Je veux bien que les saisons m'usent.

A toi, Nature, je me rends;

Et ma faim et toute ma soif.

Et, s'il te plaît, nourris, abreuve.

.....

Et libre soit cette infortune.

季節々々がこの俺を使い減らしてくれればよい。

地獄の一季節 註解

自然よ、此の身はおまへに返す、

お氣に召したら、食はせろ、飲ませろよ。

.....

ただこの不運に屈託だけはないやうに！

「自然」における、徹底還相行における、有即無、無即有の世界における、任運の自由である。その他参照。

つづれもランボオの世界における自由である。キリスト教は自己の魂にかかる意味での自由を与へてくれるわけではないのである。かかる noblese と liberté とが与へられるところには le sang païen と l'Esprit とは相即的に、交互轉換的に結びつき、そこに神が現成するはずである。

Hélas ! l'Evangile a passé ! l'Evangile ! l'Evangile : —

Evangile はイエスキリストの教義と信条なのであるが、ここは本来的な意味 bonne nouvelle の意味で使はれてゐる。le sang païen は戻つてくる。l'Esprit は近い。しかしこの両者はまだ相即的に、交互轉換的に結びつくには至つてゐない。しかもキリストは俺を救つてはくれなう。そのことを嘆く言葉である。

a passé といつてゐるのは、「西洋」が始まる以前には、太古、蛮地の世界には、ランボオの世界が具現してゐた、あるいは具現してゐるとみてゐることに基くのである。

J'attends Dieu avec gourmandise : —

この Dieu はもちろんキリスト教の神ならぬ神である。自己の魂に眞に noblese と liberté とを与へて救つてくれる神である。それは le

sang païen と l'Esprit とが相即的に、交互轉換的に結びつくところに現成する神であり、日常眼前の事象を媒介として行ぜられる神である。

Je suis de race inférieure de toute éternité: —

前にも引用したが、本節の終りに、

Je reviendrai……J'aurai de l'or……Je serai mêlé……Sauvé.

と云って、徹底還相行を語つてゐる。かかる徹底還相行においてはじめて、ランボオの神は現成し、そこに真に救ひがあるのである。ところが *race inférieure* は徹底還相行以前の世界である。「無化往相」の世界として、これを媒介とせねばならぬのはあつても、そこにはまだ真の救ひはないのである。

かくて神をがつがつとして待つてゐるのだが、ああ、俺はやっぱりまだ *race inférieure* であることをまぬがれない。依然として砂浜における酔眠を求めてゐるのだ。そこには *le sang païen* と *l'Esprit* とが相即的に、交互轉換的に結びつくには至らない、救ひはない、神は現成しないのだとの意味でかく言つてゐるのである。

かくて、つぎにその *race inférieure* の *plage armoricaine* への生活が描かれ、さらにこのつぎの節 (p. 20—p. 21) で還相行が語られるのである。

Me voici sur la plage armoricaine. Que les villes s'allument dans le soir. Ma journée est faite; je quitte l'Europe. L'air marin brûlera mes poumons; les climats perdus me tanneront.

Nager, broyer l'herbe, chasser, fumer surtout; boire des liqueurs fortes comme du métal bouillant, — comme faisaient ces chers ancêtres autour des feux.

ゴオルの国アルモリックの海岸にゐる。夜が来たら、街々に灯が点される。俺の日程は終つた、俺はヨーロッパを去る。海の空気は俺の肺臓を焼くだらう。僻陬の気候は俺の肉を糶すだらう。泳いで、草を噛み砕き、狩猟をして、殊更に煙草をふかし、煮え滾る金屬の様な火酒をのむ——焚火を囲んで、あの懐しい祖先の人々が為つた様に。

Me voici sur la plage armoricaine: —

以下、この *race inférieure* に関つた *plage armoricaine* における生活を描いてゐる。こゝは p. 13 の

Les Gaulois étaient les écorcheurs de bêtes, les brûleurs d'herbes les plus ineptes de leur temps.

に照応するものがある。その他、

Cf. *Barbare.*

Bien après les jours et les saisons, et les êtres et les pays, 日々と諸季節と、また、人間どもと国々とを、遙か彼方の後にし

Cf. *Enfance, I.*

Cette idole, yeux noirs et crin jaune, sans parent ni cour, plus noble que la fable, mexicaine et flamande; son domaine, azur et verdure insolents, court sur des plages nommées, par

des vagues sans vaisseaux, de noms férocelement grecs, slaves, celtiques.

この偶像、眼は黒く髪は黄に、親もなく、侍者もなく、物語よりも気高く、メキシコ人であり、またフラマン人。その領土は、傲岸無頼の紺碧の空と緑の野辺、船も通はぬ波濤を越えて、猛々しくもギリシヤ、スラブ、ケルトの名をもて呼ばれた浜辺から浜辺に互る。

この様に、*race inferieure* に関する、世俗としての現世からの逸脱の生活はしばしばランボオの念頭に上つてゐる。そしてこれはいづれもランボオ的世界の往相面を語るものである。そしてこの *Enfance, I.* の冒頭の句は、「死」に「看護修道尼」を求めた *Les Soeurs de Charité* の

Le jeune homme dont l'oeil est brillant, la peau brune,

Le beau corps de vingt ans qui devrait aller nu,

Et qu'eût, le front cercle de cuivre, sous la lune

Adoré, dans la Perse, un Génie inconnu,

その若者、眸は輝き、皮膚は褐色、

裸のまま歩いててもよい二十歳チの見事な肉体をして、

額チは赤毛に縁どられ、月光の下、ヘルシヤの国で、

或る未知の精霊を礼拝したとおぼしき若者、

これに照応するものである。

かくて *plage armoricaine* における生活は往相面における自然の生活である。

Que les villes s'allument dans le soir. Ma journée est faite;

je quitte l'Europe : —
UO villes de Enfance, VU 444444

A une distance énorme au-dessus de mon salon souterrain,
les maisons s'implantent, les brunes s'assemblent. La boue
est rouge ou noire. Ville monstrueuse, nuit sans fin!

俺の地底のサロンの上を遙かに遠く隔つて、人々の家が並び立ち、霧が立ちこめる。泥は赤く或は黒い。怪物の都会、果てしない夜。

この *ville* に照応するものであらう。この *ville* は地底のサロンと対比的に醜怪なるものとして、果てしなき夜として描かれてゐる。したがって今、*plage armoricaine* にあつて、はるかにかかる意味での *ville* を想ひやうと言葉として受取るべきであらう。

かくて、かかる *ville* からは遠く離れて今、*plage armoricaine* にある身としては *Ma journée est faite* といふわけであり、この言葉はつぎの *Je quitte l'Europe* につながる言葉であり、ともに一切捨離を現はす言葉とみてよいであらう。

L'air marin brûlera mes poumons : —

この *l'air marin* は直接的にはいふまでもなく、*plage armoricaine* からきてゐる言葉であるが、一方ランボオは蛮地とともに、海、水に対する関心は常に深く、世俗としての現世否定の彼方によく海や水をみてゐるのである。海や水に対しては、汚れを洗ひ浄めてくれるもの、清浄なる世界として、また一切捨離の彼方にひらかれる無辺際界として、底も両岸もなく、自我の棹をさすことのない任運の世界として扱つてゐる

のである。そのニュアンスをもちろむことでもふくめてみるものと考えねばならない。

かかる海や水に対する関心、そのあり方を示す代表的なものが *Bateau ivre* である。今はその第五節だけを引用しておこう。

Plus douce qu'aux enfants la chair des pommes sures,

L'eau verte pénétra ma coque de sapin

Et des taches de vins bleus et des vomissures

Me lava, dispersant gouvernail et grappin.

爽やかに酸き林檎より 子供らにとりては甘き

緑なる海水は わが縦材の舟体に滲み入り、

色青き葡萄酒の汚染、嘔吐の汚穢を

洗ひ浄めて、舵も失せたり、錨も失せたり。

その他 Cf. *Le Coeur volé*.

O fots abracadabrantésques,

Prenez mon coeur, qu'il soit lavé!

おお、摩訶不思議な海の波よ、

僕の心臓を手にとって、どうか洗ひ浄めてくれ!

Cf. *Délires*, II, p. 61.

Je dus voyager, distraire les enchantements assemblés sur
mon cerveau. Sur la mer, que j'ai jamais comme si elle eût dû
me laver d'une souillure, je voyais se lever la croix consolatri-
ce.

俺は旅をして、この脳髓に集り寄った様々な呪縛を、穢つては

ねばならなかった。俺は海を愛した、この身の穢れを洗ひ落してく
れるものは海だったに相違ない。俺は海上に慰安の十字架の昇るの
を見た。

その他 *Les Poètes de sept Ans; Mémoire; 等参照* 45頁 Cf.

Nuit de l'Enfer, p. 35.

Les hallucinations sont innombrables. C'est bien ce que j'ai
toujours eu : plus de foi en l'histoire, l'oubli des principes. Je
m'en tairai : poètes et visionnaires seraient jaloux. Je suis
mille fois le plus riche, soyons avare comme la mer.

幻想は数限りない。それこそ正しく常々俺の所有したものであ
る。最早歴史も信ぜず、諸原理をも忘れ去る。だがそれについては
語るまい。詩人等、夢想家達は羨望するかも知れない。奴等より俺
の方が、千倍も豊かである。海のように貪婪にならう。

この海の風が俺の肺臓を焼くとき、この *Soleil et Chair* へ

Le Soleil, le foyer de tendresse et de vie,

Verse l'amour brûlant à la terre ravie,

情愛と生命の原動力たる太陽は

狂喜する大地に熱烈なる愛 (*l'amour brûlant*) を降りそそぐ。

このようにある様に、また *Oraison du Soir* へ

Tels que les excréments chauds d'un vieux colombier,

Mille Rêves en moi font de douces brûlures :

Puis, par instant, mon coeur tendre est comme un aubier

Qu'ensanglante l'or jeune et sombre des coulures.

Des champs

.....

Descendons en nos celliers ;

Après, le cidre et le lait.

Moi—Aller où boivent les vaches.

Nous sommes tes Grands-Parents ;

Tiens, prends

Les liqueurs dans nos armoires ;

Le Thé, le Café, si rares,

Frémissent dans les bouilloires.

—Vois les images, les fleurs.

Nous rentrons du cimetière.

Moi—Ah ! tarir toutes les urnes !

とらべてみる。象徴的な意味への酔酒を、p.19における「砂浜の酔眠」
(un sommeil bien ivre, sur la grève)を求めてみるわけでもある。しか
この「酔酒」「砂浜の酔眠」はマンボオ的世界の往相面を示すもの
である。

上段 p.19 にある Je reviendrai....., J'aurai de l'or..... Je serai
mêlé.....Sauvé, かへ還相行が語られる様に、上掲 Comédie de la Soif
に於けるそのIIIに於ける

Viens, les Vins vont aux plages

.....

Gagnons, pèlerins sages,

L'Absinthe aux verts piliers.....

Moi—Plus ces paysages.

Qu'est l'ivresse, Amis ?

J'aime autant, mieux, même,

Pourrir dans l'étang,

Sous l'affreuse crème

Près des bois flottants.

来給へ、酒は海辺を乱れ走り、

.....

廻国の君子等、どうだ一つ手に入れては、
アプサンの作る緑の列柱.....

俺—ふん、結構な景色だ、

おい、酔っぱらふとはどういふことだ。

池の藻屑と腐るも同じさ、

どうして、よっぽどましかも知れぬ。

むかつくクリームの下敷で、

朽木がぶよぶよ浮いてるか。

この様に酔酒を否定した還相行が語られてゐる。

**Je reviendrai, avec des membres de fer, la peau sombre,
l'oeil furieux : sur mon masque, on me jugera d'une race forte.
J'aurai de l'or : je serai oisif et brutal. Les femmes soignent
ces féroces infirmes retour des pays chauds. Je serai mêlé aux
affaires politiques. Sauvé.**

俺は、鋼鉄の四肢と、浅黒い肌と、兇暴な眼とをもつて還つて来るだらう。人々は俺の顔貌を眺めて強烈な人種の生れと考へるだらう。黄金を俺は貯めよう、「俺は財宝を獲るだらう、」何も為さない、しかも獣物のやうな〔無為にしてブリュタアルな〕男にならう。女達は、熱帯の国々から帰還するこれらの兇暴な廢人共を看護するのだ。俺は政治の渦中に捲き込まれる。救はれるのだ。

Je reviendrai, avec des membres de fer, la peau sombre,
l'oeil furieux : —

これは上記の *plage armoricaine* への生活、ランボオの世界における往相面の否定、即ち有化還相の面を語らうとするのである。

但し今までにすでに述べてきた様に、ここは *Je reviendrai*...*J'aurai*...*Je serai mêlé*...といふ様に *futur* の形で述べられてをり、いはば思想的予見として述べてゐるのである。したがつて、このつぎに *Main-tenant je suis maudit, j'ai horreur de la patrie* といふのであり、依然として砂浜の酔眠を最上のもとする往相面に止つてゐるのである。
des membres de fer, la peau sombre, l'oeil furieux は *plage*

armoricaine から還つてきた、未開地の天候にきたへ上げられた肢體風貌を語るものではあるが、同時に、世俗としての現世の否定を経てきたたくましさ、煩惱解脱の安らぎ、無求無一物を行ずるやつれ、不動の非情が同時に語られてゐるのである。

この一句は *Les Soeurs de Charité* にあける

*Le jeune homme dont l'oeil est brillant, la peau brune,
Le beau corps de vingt ans qui devrait aller nu,
Et qu'eût, le front cerclé de cuivre, sous la lune
Adoré, dans la Perse, un Génie inconnu,*

Impétueux avec des douceurs virginales

Et noires, fer de ses premiers entêtements,

Pareil aux jeunes mers, pleurs de nuits estivales,

Qui se retournent sur des lits de diamants ;

その若者、眸は輝き、皮膚は褐色、

裸のまま歩いててもよい二十歳の見事な肉体をして、

額は赤毛に縁どられ、月光の下、ペルシヤの国へ、

或る未知の精霊を礼拝したともおぼしき若者、

童貞らしい陰鬱な優しさを帯びて、しかも慄慄、

生れながらの頑固な性格に誇りを持ち、

ダイヤモンドの地層の上で反転する、

夏の夜の涙、若々しい海にさながら。

この二句を想はせるものがある。

かくて

sur mon masque, on me jugera d'une race forte.

といふわけである。この race forte は直接的にはもちろん、身体的な意味での race forte であるけれども、その背後にはやはり、煩惱解脱の安らぎ、無畏の境地にあるものとしての race forte の意味をも多く含みうるものと考へられる。だからつぎに J'aurai de l'or : je serai oisif et brutal といふのである。

J'aurai de l'or : je serai oisif et brutal : —

この de l'or は金を貯める意味での de l'or ではなく、財宝としての de l'or である。その de l'or は “Solde” における diamant あるいは “Fêtes de la Patience” における Age d'Or の意味における de l'or である。あるいはその他 “Enfance” における boules de saphir, de métal また “Après le Déluge” における pierres précieuses などと同じの意味を現はすもので、ランボオの世界を指すものである。

即ち Je reviendrai……といつてゐる、この有化還相行において、往相即還相としてそこにはじめて自己の世界がひらかれるであらうことをいつてゐるのである。

そこにおいてまた oisif な brutal な生き方も出てくるわけである。oisif については上述参照。brutal は残忍といふよりは brute であることに基く状態をなしてゐるものであり、brute であるところからは、手の加はつてゐない、生ナのままの状態をなしてゐるのである。たとへば

Mauvais Sang, p. 23 ヲ

Prêtres, professeurs, maîtres, vous vous trompez en me livrant à la justice. Je n'ai jamais été de ce peuple-ci ; je n'ai jamais été chrétien ; je suis de la race qui chantait dans le supplice ; je ne comprends pas les lois ; je n'ai pas le sens moral, je suis une brute : vous vous trompez……

司祭や教授や先生方、俺を裁判所の手に渡したといふのが君達の誤りだ。俺はもともと、ここに居るこの民族に属してゐたことがない。基督教徒だった事は一度もない。刑罰を受けながら歌を歌つてゐた人種だ。法律などは解りはしない。道徳的意志も持つてゐない。俺は一個の禽獣なのだ。君達は思違ひをしてゐるのだ……。

といつてゐる様な意味での brute それに基く状態としての brutal な状態をやつてゐるものでもある。また Mauvais Sang, p. 20 になら

Plutôt, se garder de la justice. — La vie dure, l'abrutissement simple,……

むしろ、正義にとりつかれまいと用心する事だ。——辛い命、単純な愚鈍、——

といつてゐる。かく brutal であるといふことは、あるがままの世界をあるがままに見て動ぜぬことのない impassible な状態にも通ずるものがある。

Les femmes soignent ces féroces infirmes retour des pays chauds : —

女は *Délirés I* に見られる様に、世俗、煩惱の象徴として、よく使はれてゐる。その他だとくば、*Les Soeurs de Charité* に於いて

Mais, ô Femmes, monceau d'entrailles, pitié douce,

Tu n'es jamais la Soeur de charité, jamais,

Ni regard noir, ni ventre où dort une ombre rousse,

Ni doigts légers, ni seins splendidement formés.

しかし、世の女人よ、臍腑の塊り、優しげな憫れな者よ、

お前は断じて、断じて看護修道尼ではない、

お前は黒い眼差も、栗色の影のまどろむお腹も、

軽やかな指も、ふっくらとした乳房も持つてはゐない。

また、*Conte* において

Toutes les femmes qui l'avaient connu furent assassinées.

彼を知った女達は、すべて殺された。

かくいづれも世俗、煩惱の象徴として使はれてゐる。もちろんこの場合の女達も、世俗、煩惱の世界の意味であり、還相面における有の世界を意味する。

féroces infirmes とは、かかる *oisif* な *brutal* な世界にすむものは世俗的常識の目からみれば、それは一種の *infirmes* であるわけだ。しかもランボオ自ら *philosophie féroce* といつてゐる様に、それは兇暴に近いまでの一切合財の有の否定を媒介とするものである。かくて *féroces infirmes* といふわけである。

そしてかかるランボオ的世界の具現者であるところの *féroces infirmes* を、世俗としての女達が看るといふことは、無の有化還相を物語

るものである。

Cf. *Angoisse*.

Rouler aux blessures, par l'air lassant et la mer; aux supplices, par le silence des eaux et de l'air meurtriers; aux tortures qui rient, dans leur silence atrocement houleux.

転々として廻るのだ、人を疲れさせる風にのり、海を渡って、傷口の上を。生命を奪ふ水と風との沈黙の中で、刑罰の上を。兇暴にうねりを上げる沈黙の裡に、嘲笑ふ拷問の上を。

ここにも違った言葉ではあるが、否定を媒介とする有化還相行が語られてゐる。

Je serai mêlé aux affaires politiques. Sauvé:—

いふまでもなく、これも前の言葉にひきつづき、有化還相行、その徹底還相行を語る言葉であり、そこにこそ真に救ひのあることをいふのである。

なほ、還相行は随所に語られてゐるがその二、三を左に引用しておかう。その最も代表的なところは本節につづき p. 20—p. 21 の節である。

その他には *Adieu*, p. 84.

Moi! moi qui me suis dit mage ou ange, dispensé de toute morale, je suis rendu au sol, avec un devoir à chercher, et la réalité rugueuse à étreindre! Paysan!

この俺、嘗ては自ら全道徳を免除された道士とも天使とも思つた俺が、今、務めを捜さうと、このちびざらした現実を抱きしめようと、土に還る。百姓だ。

および、同じく p. 87.

Recevons tous les influx de vigueur et de tendresse réelle.
Et à l'aurore, armés d'une ardente patience, nous entrerons
aux splendides villes.

生氣と現実の温情との流れ入るすべてを受けよう。暁が来たら俺達は、焼え上る忍辱の鎧を着て、光り輝く街々に這入らう。

ここにこそランボオは「身心ともに真実を得る」ことができ、神の現成を見たのであり、かくて救ひがあったのである。(但しここには前述の様にまだ思想的予見として語つてゐるのである。)

なほ序でに、ランボオにおける救済について簡単に一言しておきたい。ランボオは二元対立の相対的世界の否定、無化往相、さらにその否定としての有化還相行に、往相即還相、還相即往相としての有化還相に、自己の世界を、真実なる世界を、神の世界を見出したのであり、そこに救ひを見出したのであるが、さらにランボオにおいては他者の救済の思想がある。

Cf. Délires, I, p. 46.

Parce qu'il faudra que je m'en aille, très loin, un jour. Puis
il faut que j'en aide d'autres : c'est mon devoir.

何故で、俺はいつかは、遠い処に行、ちまふんだからな。それに他の奴等だ、て助けてやらなくてはならない、それが俺の義務なんだ。

Cf. Délires, I, p. 48.

Tu me feras mourir comme il a fait mourir cette femme.
C'est notre sort, à nous, coeurs charitables……

この男がこの女を殺してしまった様に、お前は俺を殺してしまふだらうよ。それが俺達の運命だ、俺達のような情深い人々の運命なんだ……

ことに、この p. 48 のところは、趙州の「お前は極楽へ行け、わしは地獄へ真逆様」といった言葉を想はせるものがあり、先度化他の思想がみられる様である。

その他 Cf. Mauvais Sang, p. 26.

J'ai laissé des âmes dont la peine s'accroitra de mon départ!
Vous me choisissez parmi les naufragés ; ceux qui restent sont-ils pas mes amis ?

Sauvez-les !

俺は多くの靈魂タインを見棄てて来たが、彼等の苦しみは俺の出発によって増す許りであらう。貴方は、(神よ) 難破した人々の中から俺を選んで下さった。が、取り残された人々も俺の友ではないか。彼等を救ひ給へ。

Maintenant je suis maudit, j'ai horreur de la patrie. Le
meilleur, c'est un sommeil bien ivre, sur la grève.

差当っては何はれの身だ、俺は祖国を怖れてゐる。砂浜にごろりと臥して、眠りこけるのが何よりだ。

本節はランボオ的世界の往相面としての race inferieure、その plage armoricaine の生活に始つて、さらに還相面が語られてゐる、しかしそれは Je reviendrai……J'aurai……Je serai mêlé……といふ様

に futur の形で述べられてをり、いはば思想的予見に止つてゐるのである。

それに対して、こゝで maintenant とつてゐるのつまり、現在はまだかかる還相面にはなく、したがつて呪はれの身であることをいふのである。祖国を恐れ、砂浜における醉眠を最もよしとするのである。思想的予見としては Je serai mêlé aux affaires politiques といつてゐるのであるが、今、それに対して祖国フランスを恐れるといふことは、いまだその還相面にはゐないことを意味し、砂浜における醉眠を最もよしとすることは、plage armoricaine の生活から抜け出し得ないことを、即ちその往相面に止つてゐることを意味するわけである。したがつてそこには眞の救ひはなく、呪はれの身であるとする所以である。

尤もつぎの節 (p. 20—p. 21) 以下において語る様に、有化還相の面に到達した場合、有化還相は即無化往相であり、交互轉換的に媒介しあふものである故に、單純に無化往相の面には神は現成せず、救ひはないとは言へないのである。(この点については特々 Les Illuminations 参照。) 今、こゝで race inférieure とつての plage armoricaine における生活、無化往相の面に救ひなしとしてゐるのは、思想的展開の経路としての、有化還相の面に到達するまでの、無化往相の面に救ひなしとしてゐるのである。あたかも Les Soeurs de Charité において、「死」に「看護修道尼」を求めた様に、一切合財の絶望的、虚無的な否定行、それを媒介とすることは求められねばならないが、單なるかかる否定行には救ひなしとしてゐるわけである。

かかる意味で、單に無化往相の面に止つて有化還相の面に立ち至らな

いことは、ランボオ自身の言葉を借りるならば、それは古めかしい隱遁 vieille retraite である。

Cf. Barbare.

Loin des vieilles retraites et des vieilles flammes, qu'on entend, qu'on sent,

人々が理解して、人々に感じられる古めかしい隱遁や古めかしい情火とは、遙かに遠く離れて、

そしてもし、往相即還相、還相即往相としての徹底還相行をまなほ隱遁といふならば(それはある意味でさういふ理由がある)、それは illustre retraite である。

Cf. Vies.

Dans une magnifique demeure cernée par l'Orient entier
j'ai accompli mon immense oeuvre et passé mon illustre retraite. J'ai brassé mon sang. Mon devoir n'est remis. Il ne faut même plus songer à cela. Je suis réellement d'outre-tombe, et pas de commissions.

俺は東洋全土で囲まれた壯麗な住居で、自分の大業を完成して、赫々とした隱遁を過した。俺は俺の血液を攪拌した。再び務めはこの手に戻った。これに就いては夢みることすら許されぬ。本場に墓場の向ふから来たこの俺だ、何の用事があるものか。

砂浜における醉眠 un sommeil bien ivre, sur la grève については上掲 Comédie de la Soif 参照。〔未完〕